研究報告

プロスポーツ観戦者のソーシャル・キャピタルについて：FC岐阜ホームゲーム観戦者の事例研究

川西　司[1)]・菊池　秀夫[2)]

Assessing the Social Capital of Sports Spectators: A Case Study of Spectators at FC Gifu Home Game

Tsukasa KAWANISHI, Hideo KIKUCHI

1．はじめに

1990年代以降、Putnam（1993）の研究を機にソーシャル・キャピタルという概念に注目が集まっている。ソーシャル・キャピタル（Social Capital：社会関係資本、以下SCと略）とは、「ネットワーク（社会的なつながり）」「規範」「信頼」といった社会的主体が持つ特徴によって、共通の目的を達成するために協調行動を導くものとされる（内閣府，2003）。SCが豊かな地域は、政治的参加の活性化、子どもの教育成果の向上や治安の向上、地域経済の発展、住民の健康状態の向上が見られることが指摘され、国や自治体においても、地域力の基礎をなす概念として捉えられている（内閣府，2003）。

SCの理論的枠組みは、元々Coleman（1988）が社会学の分野で論じてきたが、それをPutnam（1993）が政治学に援用したことによって政治学・社会学を中心に経済、疫学などの研究領域にも広がっていった（鹿毛，2002）。米国社会を対象にしたPutnam（2000）の著書『Bowling Alone』では、各州間のSC比較が行われているが、そこでは市民参加とSCがどのように変化したのかについて分析がなされている。政治参加や市民参加、職場でのつながり、ボランティア活動といった様々な分野について、米国社会におけるSCの低下について報告されている。SC論は、地域レベルだけでなく、個人レベルでの行動に注目する研究分野にも継承されてきた（Baker, 2001; Woolcook, 2000; Lin, 2001; Burt, 2005）。

また、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本において政府レベルでの調査が行われ、国策においてSCの重要性（内閣府，2003）が報告されるようにもなった。日本においても、内閣府（2005）「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタル」では、一定水準以上の富裕化、家族機能の崩壊、地域内での生活時間そのものの減少、携帯やICTの普及といった要因により、人とふれあう機会の減少や人間関係の希薄化という状況が生み出されていることが指摘されている。長積ら（2006）は、これらの報告書をもとに、スポーツが私的財としてだけではなく、むしろ非排除性や非競争性に特徴付けられる公共財としての特徴を持つことに注目し、スポーツとSCとの関係性について論じている。また2010年にはわが国のスポーツ政策の方向性を示すスポーツ立国戦略が策定されたが、その中ではスポーツは地域住民の結びつきを強め、地域の一体感を生み、ソーシャ

[1)] 大学院体育学研究科博士課程
[2)] 中京大学スポーツ科学部

ル・キャピタル（社会関係資本）の形成に大きく貢献するものとされており、スポーツの価値を活用して地域社会問題を解決することで、よりよい社会実現に向けた新たなスポーツ文化を確立する必要性が強調されている。

SCに関する実証的研究では、疫学の分野でイチロー・カワチら（2008）がSCが豊かで経済格差が少ない地域ほど健康な人が多いことを報告している。またSCが豊かな人ほど身体活動が活発であることを示した研究（Uesihima et al., 2010）や、高齢者におけるSCと健康との関連について明らかにした研究（辻，2004）などがみられる。上野（2006）は、SCの醸成や蓄積は地域コミュニティの評価を高め、Jクラブや地域スポーツクラブなどもその一翼を担うことが期待されると報告している。近年、プロスポーツチームや地方自治体が「スポーツを通じた地域づくり」を掲げており、相互発展の手段の一つとしてSCの有効性も論じられている。日本総合研究所（2009）では、地域と密接な関係を持つJリーグクラブがSCの源泉となりうると報告している。ホームタウンの居住者や観戦者にSCが醸成されていれば、地域コミュニティにも影響を与えるはずである。その関係を明らかにすることで、地域コミュニティの再生につながるのではないかと考えられる。

スポーツ経営学分野においては、総合型地域スポーツクラブがコミュニティ形成の場所として機能し、SC醸成の一つの手段になり得ると報告されている（中西，2005；河原，2007；長積ら，2009；稲葉・山口，2009；Okayasu et al., 2010；舟木・野川，2012）。プロリーグに新規参入したチームと地域住民との関係を地域づくりの立場からの研究（舟木・工藤，2013）やプロスポーツチームがSCを醸成するという点で新しい公共財となる可能性を指摘する研究がなされている（金，2011）。またプロスポーツ観戦とSCという視点では、観戦者の経験価値がSC形成に影響することを指摘した研究（有吉・横山，2013）がみられる。しかし、プロスポーツとSCとの関係を扱った研究はほとんどなく、未だ緒に就いたばかりといえる。

研究目的

地域におけるプロスポーツチームの存在と地域住民間でのポジティブな関係は感覚的には理解できる。しかし、そうした関係は未だ十分に明らかにされている訳ではない。そこで本研究ではプロスポーツチームと地域におけるSCとの関連性について検討することを目的とする。具体的には、Jリーグ・ディビジョン2所属FC岐阜のホームゲーム観戦者を対象として以下の2点について検討する：(1) 観戦者のSCを定量的に把握する。(2) 観戦者のSCと個人的属性およびサッカー観戦行動との関係を明らかにする。

2．研究方法

SCの概念には抽象的なところが多分にあり、その測定手法も統一されていないのが現状である。様々な定量的な研究が存在するが、日本では「ネットワーク」、「信頼」、「規範」というPutnamの定義を踏まえた内閣府調査（2003）が代表的である。また、日本総合研究所（2007）では、内閣府の調査を元に「ネットワーク」に対応するものとして、近隣でのつきあいや社会的な交流を捉えた「つきあい・交流」の要素、他人に対する一般的な信頼と特定の人を対象とした相互信頼・相互扶助を捉えた「信頼」の要素、「規範」のうち、互酬性の規範の表れとして社会的活動への参加を捉えた「社会参加」の要素の3つを設定している。 本研究では、日本総合研究所（2007）の調査方法に依拠して、SCを把握することとした。前述したSCの構成要素に従ってSCの測定に関する質問項目をまとめたのが表1である。社会的な交流についての項目「スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況」に関しては若干文言の調整を行った。本研究では、サッカー観戦者を対象としているため、「サッカー観戦を除いたスポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況」という表現にしている。

（1）調査の実施

明治安田生命J2リーグ2015/2016シーズンFC

表１　ソーシャルキャピタル（SC）調査項目

要因	構成要素	アンケート調査項目
信頼	一般的な信頼	一般的な信頼度
	相互信頼・相互扶助	旅先での信頼度
つきあい・交流	近所でのつきあい	近所づきあいの程度
		近所づきあいのある人の数
	社会的な交流	友人・知人との職場外でのつきあいの頻度
		親戚とのつきあいの頻度
		職場の同僚との職場外でのつきあいの頻度
		スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況
社会参加	社会参加	地縁的な活動への参加状況
		ボランティア・NPO・市民活動への参加状況
		その他の団体・活動への参加状況

日本総合研究所（2007）を参考に作成

岐阜対ジュビロ磐田戦の当日（2015年7月22日）、FC岐阜のホーム「岐阜メモリアルセンター」敷地内にて15時30分～18時30分（試合開始直前）の時間帯で手渡し配布・回収の質問紙調査を行った。質問紙の配布では、事前にトレーニングを受けた調査員11名が、まず調査趣旨の説明を行い、調査への協力に同意した参加者のみに対して質問紙を配布・回収した。配布総数は318部、そのうち回収数は314部、有効回収率は98.7％であった。本研究ではFC岐阜のファンと回答した者のみを扱うため、質問紙でFC岐阜のファンと回答した260名を分析対象とした。調査項目は、個人属性5項目、サッカー観戦関連10項目、SC関連3要因「信頼」、「つきあい。交流」、「社会参加」15項目、クラブ満足度7項目等であった。

（２）予備分析　全国調査2007との比較検討

本研究ではまず、日本総合研究所（2007）が実施した一般人を対象とした全国調査によるSC測定結果とその調査から抽出した岐阜県のSC測定結果と、FC岐阜のサッカー観戦者を対象としたアンケート調査によるSC測定結果の単純比較を行った。本研究でのSCの測定については日本総合研究所（2007）の研究方法に依拠している。そのためこの比較はFC岐阜の観戦者のSCがどのような位置づけなのかを検討するためである。

日本総合研究所（2007）が実施した全国調査の結果ならびにその調査から抽出した岐阜県、FC岐阜サッカー観戦者との比較結果では、SC関連15項目全ての項目でFC岐阜のサッカー観戦者の値が高くなった。全国調査と今回の調査では時間的な差があるため、完全な比較とは言えないが、これらの結果から、FC岐阜のホームゲーム観戦者のSCは一般の人々よりも高いであろうと推定される。この結果は、金（2011）のサッカー観戦者のSCは高いという研究報告に沿うものであり、今回のSC測定も比較的妥当なものであることを裏付けている。

（３）分析方法

SCの指数化については、日本総合研究所（2007）の手法に基づき行った。日本総合研究所では、SC指数について質問紙調査の各設問項目の回答値を標準化（平均0、標準偏差1）し、構成要素毎に平均値を求め、最後にSC要因毎の平均値を算出している。この方法は統計的処理が比較的簡便であり、多くの調査研究で用いられている。しかし、SCの各設問項目は異なる測定尺度によって構成されているものもあり、その取り扱いには注意が必要であるとの指摘（金谷，2008）もある。本研究では、そうした指摘に留意しながら分析を行った。

SCの指数化の具体的な手順としては、基本的に順序尺度で測定された項目を間隔尺度を構成するものと仮定して、SCを構成する3要素「信頼」、「つきあい・交流」、「社会参加」について指数の算出を行った。その後、「信頼」、「つきあい・交流」、「社会参加」それぞれの指数を足し合わせて単純平均をしたものをSC総合指数とした。本研究ではこの総合指数について、工藤らの研究（2013）を参考に、SCを低群と高群の2群に分けて、回答者の特徴の把握を行った。尚、低群と高群の分割には、回答者のSC総合指数の中央値を用いた。中央値は−.0758であったため、最小得点から−.0758をSC低群（n=130）、−.0746から最大得点までをSC高群（n=130）とした。

3．結果

（1）個人的属性とサッカー観戦行動

回答者の個人的属性は、性別では、男性が168人（64.6%）、女性が92人（35.4%）であった。年齢では、30歳代が71人（27.3%）、40歳代が101人（38.8%）を占めていた。30歳代と40歳代で172人（66.1%）、全体の約3分の2を占めている。職業では、民間企業・団体の勤め人が94人（36.2%）で、次いで臨時・パート勤め人と回答した人が43人（16.5%）であった。居住地域では、岐阜県内が222人（85.3%）、岐阜県外が32人（13.5%）、無回答が3人（1.2%）であった。岐阜県内居住者についてみてみると、岐阜市居住者は147人（56.5%）で、岐阜市以外の居住者は75人（28.8%）であった。居住年数に関しては、10年未満が85人（32.7%）、次いで10年以上20年未満が76人（29.2%）であった。

サッカー観戦行動についてまとめたのが表2である。ファン歴に関しては「2〜4年目」と回答した人が127人（48.8%）で最も多くみられた。「8年以上」と回答した人は45人（17.3%）であり、FC岐阜がJクラブとして認定される前のクラブからのファンであると考えられる。ファン歴の平均は4.4年であった。2014-2015シーズンのホームゲーム観戦回数では、「1〜5回」と回答した人が77人（29.6%）で最も多くみられた。平均観戦回数は、平均11.8回であった。スタジアム同伴者は、「家族」という回答者が131人（50.4%）で約半数を占めており、スタジアム同伴人数は平均約2.9人であった。ファンクラブ入会有無については、「入会している」と回答した人が133人（51.2%）、「入会していない」と回答した人は127人（48.8%）であった。またファンクラブ入会者のうち74人（55.6%）は勧誘経験があるという回答を得た。

表2　回答者のサッカー観戦について

項目	n=260	%
ファン歴		
1年目	28	10.8
2〜4年目	127	48.8
5〜7年目	60	23.1
8年以上	45	17.3
2014-2015シーズン観戦回数		
0回	15	5.8
1〜5回	77	29.6
6〜10回	54	20.8
11〜15回	18	6.9
16〜20回	32	12.3
21回以上	64	24.6
スタジアム同伴者		
一人	53	20.4
家族	131	50.4
友達	53	20.4
彼女・彼氏	8	3.1
同じクラブサポーター	12	4.6
その他	3	1.2
スタジアム同伴人数		
1人	57	21.9
2〜4人	93	35.8
5〜7人	73	28.1
8人以上	37	14.2
ファンクラブ入会有無		
入会している	133	51.2
入会していない	127	48.8
ファンクラブ入会勧誘経験（ファンクラブ入会者のみ）		
ある	74	55.6
ない	59	44.4

（2）個人的属性とSCの関係について

個人的属性とSCの関係についての分析結果をまとめたのが表3である。性別では、SC高群が男性93人（71.5％）、女性37人（28.5％）であった。SC低群では、男性75人（57.7％）、女性55人（42.3％）であった。性別とSC群のカイ2乗検定を行った結果、5％水準にて有意差がみられた。

SCの群と年齢について検討を行った結果、SC高群とSC低群において、30歳代から50歳代の人が多く見られた。50歳代から70歳代にかけてはSC高群の人が多く見られた。年齢とSC群のカイ2乗検定を行った結果、5％水準にて有意差が確認された。

SCと居住地域については、SC群と居住地域の検討を行った。居住地域については、岐阜県内はSC高群が75人（58.6％）と多くみられた。岐阜県以外の岐阜県内では高群が40人（31.3％）、低群が35人（27.1％）で高群が僅差で上回った。岐阜県外は低群の方が22人（17.1％）で多い結果となった。居住地域とSC群とのカイ2乗検定を行った結果、統計的に有意な差はみられなかった。

SCと居住年数について郡別の居住年数の平均年数について検討した結果をまとめたものが表4である。SC群ごとの居住年数の平均をみると高群（平均20.9年）の方が低群（平均16.6年）よりも平均年数が高い結果となった。つまり、居住年数が長くなることで、SCが高くなる可能性が明らかとなった。t検定を行った結果、SCの群において5%水準で有意な差がみられた。よってSCによって居住年数に差があるといえ

表3　SC群別でみた個人的属性

	SC群（n=260）						
	SC高群（n=130）	%	SC低群（n=130）	%	合計	%	χ2
性別							
男性	93	71.5	75	57.7	168	64.6	*
女性	37	28.5	55	42.3	92	35.4	
年齢							
19歳以下	9	6.9	2	1.5	11	4.2	
20歳代	9	6.9	9	6.9	18	6.9	
30歳代	35	26.9	36	27.7	71	27.3	
40歳代	40	30.8	61	46.9	101	38.8	*
50歳代	27	20.8	16	12.3	43	16.5	
60歳代	7	5.4	5	3.8	12	4.6	
70歳以上	3	2.3	1	0.8	4	1.5	
居住地域							
岐阜市	75	58.6	72	55.8	147	57.2	
岐阜市以外の岐阜県内	40	31.3	35	27.1	75	29.2	n.s.
岐阜県外	13	10.2	22	17.1	35	13.6	

*p ＜ .0.5　n.s.：not significant

表4　SC群別にみた居住年数（平均値）の比較

項目	SC群（n=260）					
	SC高群（n=130）		SC低群（n=130）			
	mean	（SD）	mean	（SD）	t値	p
居住年数	20.9	16.14	16.6	12.86	−2.369	*

*p ＜ .0.5

ることがわかった。

（3）サッカー観戦行動とSCの関係について

サッカー観戦行動とSCの関係について検討を行った結果をまとめたのが表5である。SCとファンクラブについては、SC群とファンクラブ入会有無とファンクラブ入会勧誘経験について検討を行った。ファンクラブ入会有無の結果は、SC高群が低群に比べて「入会している」と回答した人が、73人と多くみられた。「入会していない」では低群が70人（53.8%）であった。ファンクラブ入会有無とSC群とのカイ2乗検定を行った結果、統計的に有意な差は確認されなかった。

表6はSCと観戦回数およびFC岐阜のファン歴について検討した結果である。SC群別に2014-2015シーズンの観戦回数の平均値をみてみると、SC高群では観戦回数の平均は12.8回であり、SC低群の平均観戦回数10.7回よりも高い結果となった。t検定を行った結果、SC群間において5%水準で有意な差がみられた。このことからSC高群には（低群よりも）観戦頻度がより高い人が含まれることが分かった。

SCとFC岐阜のファン歴については、SC群間でファン歴の平均年数について比較した。その結果、SC高群の平均ファン歴は4.46年であり、SC低群については平均ファン歴4.41年となり、ほとんど差がみられなかった。

4．まとめ

本研究ではプロスポーツチームと地域におけるSCとの関連性について検討した。具体的には、Jリーグ･ディビジョン2所属FC岐阜のホームゲーム観戦者を対象として、(1) 観戦者のSCを定量的に把握すること、(2) 観戦者のSCと個人的属性およびサッカー観戦行動との関係を明らかにすること、の2点を目的とした。主な結果は以下の通りである。

①日本総合研究所（2007）の手法に倣いFC岐阜観戦者のSCを測定した。測定値を全国調査（2007）と比較すると、FC岐阜ホームゲーム観戦者のSC値は、「信頼」、「つきあい・社会的交流」、「社会参加」の全ての項目で高かった。

②個人的属性とSCとの関係については、居住

表5　サッカー観戦行動（ファンクラブと入会歴）とSCとの関係

	SC群（n=260）						
	SC高群（n=130）	%	SC低群（n=130）	%	合計	%	χ2
ファンクラブ入会有無							
入会している	73	56.2	60	46.2	133	51.2	n.s.
入会していない	57	43.8	70	53.8	127	48.8	
ファンクラブ入会勧誘経験							
勧誘経験あり	38	52.1	22	36.7	60	45.1	n.s.
勧誘経験なし	35	47.9	38	63.3	73	54.9	

n.s.：not significant

表6　SC群別にみた観戦回数およびファン歴の平均値

項目	SC群（n=260）					
	SC高群（n=130）		SC低群（n=130）			
	mean	(SD)	mean	(SD)	t値	*p*
観戦回数	12.8	8.94	10.7	8.01	2.016	*
ファン歴	4.45	2.84	4.41	2.96	0.107	n.s.

*p ＜ .0.5　n.s.：not significant

年数とSCとに関係が認められた。SC低群よりもSC高群において居住年数がより高くなる傾向がみられた。

③観戦行動とSCとの関係については、観戦回数とSCとに関係が認められた。SC低群よりもSC高群において観戦回数（2014-2015シーズン）が高い傾向がみられた。一方、ファン歴とSCとの間には関係は認められなかった。

まず②の居住年数については、SC高群の方が長いことが確認された。居住年数が長いことは、「人への信頼」、「つきあい･交流」、「社会参加」が活発であることを意味することであり、同一地域に長く住んでいる程、SCが高いことが明らかとなった。これは、同一地域での居住年数が長いとSCが高い傾向があることを指摘した内閣府（2003）の調査研究と同様な結果といえる。居住年数が長いほど、「人への信頼」、「つきあい・交流」、「社会参加」が活発であるということは、地域社会における人的ネットワークとその社会的な連携力を豊かなものにする効果を持つことが推測される。また、同一地域での居住年数が長くなることがSCの醸成･蓄積に寄与し、それが地域社会の安心・安全・安定などの各面に好ましい成果をもたらすという見方も考えられよう。

③については、2014-2015シーズン観戦回数とFC岐阜のファン歴それぞれにおいてSCレベル（値）の高低と関係していることが明らかになった。まず観戦回数に関しては、SC高群では低群に比べて多くみられた。SC高群では、観戦回数21回以上が低群よりも多くみられた。観戦回数21回以上はホームゲームだけではなく、アウェイゲームまで観戦に行っている。つまり、FC岐阜のホームゲーム観戦者のSC高群は、FC岐阜に対する熱心なファンであると考えられる。ファン歴に関しては8年以上と回答した人がSC低群よりもSC高群に多くみられた。8年以上のファンはFC岐阜が日本フットボールリーグ（JFL）に参入した年から、またはFC岐阜が発足した頃からのファンであると考えられる。

最後に①については、本研究ではまずFC岐阜の観戦者のSCがどのような位置づけなのかを検討するため、日本総合研究所（2007）が実施した全国アンケート調査によるSC測定結果と同調査から抽出した岐阜県のSC値と今回のFC岐阜のサッカー観戦者のSC測定結果の単純比較を行った。その結果からFC岐阜のホームゲーム観戦者のSCは全国の調査結果に比べて相対的に高いことが明らかとなった。これまでの研究でも地域で積極的に活動している人たちのSCはそうでない人に比べて相対的に高いことが報告されている。その意味では、今回の結果は多少の時間的な隔たりはあるものの、得られたSCがそれなりに妥当なものであることを示唆するものということができよう。しかしながら、元々SCが高い人がプロスポーツに関心が高くサッカー観戦に訪れているのか、観戦行動がSCを高くしているのかについては、本研究のデザインからは読み取ることは不可能であり、今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

1）有吉忠一･横山勝彦，2013,「スポーツ観戦とソーシャル・キャピタル形成についての一考察:経験価値を視点に」『同志社スポーツ健康科学』(5)，1-8.

2）Baker, W.：中島豊訳（2001）ソーシャル・キャピタル―人と組織の間にある「見えざる資産」を活用する．ダイヤモンド社.

3）Burt, R. (2005) Brokerage & Closure: An Introduction to Social Capital, Oxford University Press. p4

4）Coleman, J. (1988) Social Capital in the creation of human capital. The American Journal of Sociology, 94: 95-120.

5）Kawachi, I., Subramanian, S.V. & Kim, D. (2008)：藤澤由和・高尾総司・濱野強監訳 ソーシャル・キャピタルと健康．日本評論社.

6）Lin, N. (2001) Social Capital: A Theory of Social Structure and Action. Cambridge University Press.

7）Okayasu, I., Kawahara,Y., and Nogawa, H.

(2010) : The relationship between community sport clubs and social capital in Japan –A comparative study between the comprehensive community sport clubs and traditional community sports clubs–, International Review for the Sociology of Sport, 45 (2), 163-186.

8）Putnam, R. D. (1993)：河田潤一訳（2001）哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造. NTT出版.

9）Putnam, R. D. (2000)：柴内康文訳（2006）孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生．柏書房.

10）Ueshima, K., Fujiwara, T., Takao, S., Suzuki, E., Iwase, T., Doi, H., et al. (2010) Does social capital promote physical activity. A population-based study in Japan. ; 5 (8)

11）Woolcook, M. (2000) The place of social capital in understanding social and economic outcomes. The World Bank. p5.

12）稲葉慎太郎・山口泰雄（2009）：総合型地域スポーツクラブの運営評価に影響を及ぼす要因に関する研究―クラブ・プロフィールとソーシャル・キャピタルに着目して―，体育・スポーツ科学，第18号，1-10.

13）河原行雄（2007）：総合型地域スポーツクラブのソーシャル・キャピタルの研究，平成19年度順天堂大学大学院修士論文

14）株式会社 日本総合研究所（2007）日本のソーシャル・キャピタルと政策

15）株式会社 日本経済研究所（2009）Ｊクラブの存在が地域にもたらす効果に関する調査.

16）金 玹兌（2011）新しい公共を担う組織としてのプロスポーツクラブの可能性―地域社会への貢献活動とソーシャル・キャピタルの醸成に着目して―．早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科修士論文

17）金谷信子（2008）：ソーシャル・キャピタルの形成と多様な市民社会一地縁型vs自律型市民活動の都道府県別パネル分析『ノンプロフィット・レビュー』Vol.8，No1，13-31.

18）工藤康宏・舟木泰世・梶原健，2014，「プロスポーツチームとまちづくりに関する研究：チームと拠点地域住民の共同参画型プロジェクトの開発と展開」『SSFスポーツ政策研究』3（1），98-107.

19）鹿毛利枝子（2002）「ソーシャル・キャピタル」をめぐる研究動向（1）：アメリカ社会における三つの「ソーシャル・キャピタル」．法学論叢，151（3）：101-119.

20）舟木泰世・野川春夫（2012）：地域コミュニティの再生がスポーツに果たす役割―総合型地域スポーツクラブに着目して―，文理シナジー，16（1），7-13.

21）上野眞也（2006）：地域再生とソーシャル・キャピタル付き合いと信頼：熊本大学政策創造センター年報，1号，5-14.

22）中西純司（2005）総合型地域スポーツクラブ構想の将来展望：市民参加型「まちづくり」の可能性を求めて．福岡教育大学紀要，No.54，63-76.

23）長積仁・榎本悟・松田陽一（2006）スポーツ振興とソーシャル・キャピタルの相互補完関係：ソーシャル・キャピタル研究の視座と可能性．徳島大学総合科学部人間科学研究，第14巻，9-24.

24）長積仁・榎本悟・曾根幹子（2009）：地域スポーツクラブがコミュニティにもたらす影響－プログラムへの参加とソーシャル・キャピタルとの関係性の検討－，生涯スポーツ学研究，6（2），1-12.

25）内閣府（2003）ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて．独立行政法人国立印刷局.

26）内閣府経済社会総合研究所編（2005）コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書.

27）文部科学省（2010）スポーツ立国戦略